

---

## 運命の武装錬金(仮)

豚 × 2

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命の武装錬金（仮）

### 【Nコード】

N4918Y

### 【作者名】

豚×2

### 【あらすじ】

作者の興味本位、筆休みに書かれた作品です。ですので過度な期待をすると後悔するかも？ もともと期待も何もない作者ですが（苦笑

武装錬金×Fateのクロスものです。

内容的には一話目絞ったものですが、目に留まって読んでいただけたら幸いです。

「なんだこれっ」

夜、蛍光という文明の利器に溢れている現代において、俺は月明かりというおぼろげな光を頼りに暗闇を走り続ける。

心に浮かぶのは焦燥と尽きない疑問。

俺の僅か後方、ともすれば聞き漏らしそうな地擦りの音。生き物というには規則正しく、風に砂が舞う音としては明確過ぎる。

なのに俺の耳はそれを認識する事を拒んでいる。

だから不確か。

かといって足を止めて耳を澄ますなど論外、愚の極みだ。

その先の結果は俗にいう火を見るより明らかであり、衛宮士郎に止まるという選択肢は選べない。

「オレはいつたい……どうなってるんだよ!？」

だから堂々巡りの自問を繰り返す。

それが答えの出ている馬鹿な問いだとしても、一般的にその事実を認められないが故に――

「うぉあ!？」

鈍色の異形、生物を形取りながらその実は無機物の塊としか形容できない外見。

それが動いて俺に向かって襲い掛かってくる。

悪夢だとしてももう少しましなモノがあるだろうに、俺は今、怪物との逃走劇を演じさせられていた。

「……死にぞこないがよく躲す。が、今度は逃しはしない、大人しく――私に食われる!」

「いッ!？」

姿は大蛇。

だが、くぐもったその声が先程の光景を否定させてくれない。

この姿、怪物の正体が身近な人物であるなんて漫画か何かのような事が現実にあつてたまるかと、迫る気配に前のめりにで転がる様に避ける。

最中、視界の端に映った影を確認できたのは運が良かったと実感した。

地に足をついて振り返れば大穴が空き、這われて蹂躪された地表がそこに広がっている。

大蛇の牙は岩盤を抉り、地面が砂であるかのように容易く地下へとその身を潜り込ませる。

「クソッ！ やっぱアレは夢じゃなかったのかっ」

思考が今朝の悪夢と目の前の現実と結び、これが初めてではないという事実を明確に自覚しかけていると、懷からその存在を忘れていた携帯電話が鳴り出す。

「——ッ、誰だこんな時に——！」

そうだ、助けを呼べば——いや何考えてるんだ。

そもそも今の状況をどう説明する。よしんば信じてもらえたとしても、この現状が打開する要素にはなりえない。

それどころか悪化しかないだろう。

だというのに、俺はディスプレイに映る見慣れない名前に反射的に通話ボタンを押していた。

「誰だッ、今——」

「三分で行くそれまで持たせる」

三分って……いや、それより——

「持たせろって、今こっちがどうなってるか分かってるのか!？」

いや、そもそもアレは何で、アンタは一体何者なんだッ？」

「移動しながらでは話しづらい、掻い摘むがいいか？」

「——っ、頼む！」

当然、後方を蛇行しながら俺を追いつける怪物がこっちの事情を

知る訳もなく、通話中だろうがなんだろうがお構いなく襲い掛かってくる。

携帯を片手に、後方を確認しつつ建物の角を利用しながら少しでも話に意識を避ける様にして走り続ける。

そうして電話の主から聞き出した情報は簡潔に三つ。

アレが“ホムンクルス”と呼ばれる人に化け、人を喰らう化け物である事。

電話の主、彼か彼女がそれを斃す為にこの町にやってきた事。

そして――

「巻き込んだって……それでいたい俺は――」

追う者と追われる者、二つの存在の争いに俺は巻き込まれて■んでしまった事。

「っ!？」

視界、というよりも脳に直接流れ込んできた映像と言葉に、処理が追いつかずエラーを起こす。

それが俺にとって何よりも一番に知るべき事で、一番大事な事である筈なのにだ。

「……そうか、まだ全てを思い出してはいないか」

「思い出すって何を――」

言いかけて気付く。

背後の気配が濃くなっている感触。

電話に意識を割きすぎた。

後方の地擦り音は岩盤を砕く破砕音の如く轟音を響かせながら、確実にその距離を進めて来ている。

建物を死角にとって逃げ回ってるつもりだったが、考えてみればそつだ。

地面を噛み砕きながら高速で移動できる物体に、多寡がコンクリートの壁如きで安心していたなんて、どうかしている。

「ヤバいつ、もう来やがった。追いつかれる！」

「そうか——なら致し方ない。“力”を使うコトを許可する」

「は？ 何言つて——」

「戦え！」

俺の疑問を多い潰すように突きつけられた、いや、突き離された闘争を促す言葉。

言つに事欠いて戦え？

何を馬鹿など、余裕も無いのに心情でいえば俺は呆れていた。

「無茶言つな！ 戦えつて、あんな怪物相手にどうやれつていうんだ！？」

それより逃げ切った方が手っ取り早い。

そもそも、衛宮士郎はごく普通の一般人であつて、あんな怪物を相手できるような特別ではない。

だから、真つ向から挑むなどという無謀を犯すよりも逃げ切った方が手っ取り早い。

何より、此処に巻き込むような他人はいないのだから、このまま背を向ける事に何の問題も無い筈だ。

「このまま逃げ切つれば——」

だというのに——

「無理だ」

常識を無視した超常の存在を前にした、一般人として当たり前前の逃走という行為を体が継続しようとする俺に対し、機械越しの声はそれを否定する。

「え？」

「ヤツラはその存在を秘匿するため、目撃者を決して放つてはおか  
ない。どこまでも追い詰め、必ず始末する」

だったらどうするつていうんだ此奴は。

初めに三分持たせろといった。

なのに必ず始末されてしまうという。

この声の人物が来れば状況は間違いなく好転するのだろう。

いや、そうだと信じよう。

だが、そうまでして執拗に目撃者を抹殺するという怪物相手に衛宮士郎は三分も逃げ切る事ができるかの？

答えは否だ。

確かに、普通以上に鍛えてきた自負はあるつもりだが、それはあくまで人の努力の範疇に収まる次元の話。

こんな金属質の怪物を相手になんて想定しているわけもないし、この足で逃げ切れるなんて断定できる自信が口を出していくはずもない。

だから――

「お兄ちゃん？」

衛宮士郎が逃走から闘争へ行動を移すとしたら、そこには確固たる目的と目標が必要であり、己一人の命しか天秤に乗っていない以上、その行動に指針が触れる事がない。

もし、その針が傾くとしたらそう。

「――巻き込まれたらもう、逃げ場などない」

例えばちょうどこんな感じで――

「びつくりしたあ、そうしたの？ 恐い力才して」

「まひろ……なんで、ココに？」

例えば、血縁たにん関係にある家族が危地に足を踏み入れてしまった場

合だとか――

「逃げるまひろ！ 俺が何とか足止めする！」

クソっ！ なんでまひろがこんな所に――いや、それは考える余地がない。

今の現状、怪物に追われている俺は自分が逃げる事で手一杯、アイツが俺を“目撃者抹殺”という目的の元に追ってきてるならまだ間に合う。

この場に居合わせた何故という問答など一にも二にも捨て置き、  
即この場を離れるべきだ。

つまり、俺が囿になればいい話なのだから。

「え、何？ 何の——」

「いいからッ、俺も直ぐ戻るから先に——」

——バクン——

「空腹のままこの形態で動くのは少々こたえる」

だが、その大蛇は俺の行動を嘲笑うかのように標的を容易く変え、  
地面を突き上げながらその姿を現す。

「ま、まひろ……………」

代わりというのか、この場に、妹であるまひろの姿は影も形も無  
い。

当り前だ。

なんせ彼女はそこに恐怖の声を残す事も無く、為す術無く奴の口  
の中に消えたのだから——

「昨夜喰い損ねた分の代わり、これで良し」

この瞬間、衛宮士郎の回路は思考を停止し、尚且つ焼き切れんば  
かりに走り回る。

「てめえええ」

無駄？ 無謀？

なんだそれは、そんな言葉知らないし知りたくもない。

「まひろを、返せ——」

手に握った鉄の棒の頼りなさだとか。

「返せよ！ あいつは関係ないだろ、このッ」

手数に任せて滅多打ちにし、骨の芯まで響き返す感触が相手を殴  
打している事実を伝えるのに。

「返せ、返せ返せ返せ返せかえ——」

「調子に乗るな」

尾のたつた一振りで吹き飛ばされる脆弱さだとか。

「——つあぐ」

立ち上がろうとする意志を砕こうとする臆病な心なんて俺は知らない必要ない。

止まるなよ俺の身体っ、まひろが、家族が■■れたんだぞ。

今やらなくてどうするってんだよ！

「無知とは哀れな」

ひん曲がった鉄の棒をつつかえにして体を起こす俺を哀れといいながら、その実全く感情の色を宿さない、硝子細工のような瞳で見下ろす作り物のような顔を睨み付ける。

「——、なんだとッ」

煩い。

いいから黙ってるよお前、今から俺がてめえを■すんだから、御託ならべてねえで——

「“錬金術”によって造られたこの体は、“錬金術の力”以外は受け付けない」

——ドクン——

「ッ!？」

煮えくり返った感情を言葉に形為そうと口に出かけたその瞬間、怪物が口にした言葉を耳にした俺は強制的に停止を余儀なくされる。それは脳から——いや、生命の核である左胸からの鼓動が起こした肉体に対する命令伝達の断絶。

その鼓動があまりにも大きく一方的であるが為に、他の器官は逃走も闘争にも変じられない。

走る痛みはだが、先程までの身体が損傷を脳に訴えるようなそれではない。

もっと深い所、根源的な部分に訴えかけるそれに、脳裏に先ほど

耳に入った言葉が羅列される。

―力を使うコトを許可する。戦え―

「――力――」

断片的な記憶の残滓が“錬金術”という一つの言葉をキーに映像として組み上がっていく。

夜の廃工場。

見た事も無い怪物に襲われる少女。

自分が死んだという事実<sup>ユメ</sup>。

有る筈のない日常の続き。

非現実的な変革と象徴<sup>ホムンクルス</sup>

「……思い出した」

そうだ。俺はあの時、あの夜の廃工場で、この怪物に殺された。

『聞こえる？』

その時の事はノイズがかかったテレビの様に絵も音も上手くすくい取れない。

『キミは死んだ。もう、心臓が使い物にならない』

当然だ。

一撃で芯の臓を貫かれ、血も流し過ぎた体では聞こえていた方が異常で、こうして思い出せること自体ありえない。

『事態を測らず、力量を省みず、考えもなしに飛び込むからだ……けれど、私を助けようとしてくれたのだな……キミに少し興味が湧いた』

だけどこの声は、この時の出来事は、例えもう一度死の淵に立たされようと変わらずに思い出す事ができる。

いや、言い換えよう。

死に近づく程、衛宮士郎はこの情景を胸に抱く。

声の主、少女が手にした数字の刻まれた六角形の金属の塊。

それがもたらした命は衛宮士郎が長年切望した理想の体現であり。  
『これは人間の精神の一番深い所——本能に依って作動する。これを心臓の代用品にして生存本能を揺り起こす』

同時に痛みと苦悩の淵への道を約束したモノであつたが為に。  
希望と絶望、相反する二つを内包し、その先へ問答無用に叩き落とす。

だが、その在り様に感謝しか抱けなかったのが衛宮士郎であり、  
一つも零さずすくい取れる存在であろうとするのが俺だつたから——

『君はもう一度生きる力を手にする。そして同時にもう一つ、別の力を手にする』

衛宮士郎はこの日の“死”にある種の喜びを感じてしまった。

『それは人の闘争本能に依って作動する、戦う力……それこそが核鉄本来の用途、持つ者が秘めたる戦う力を形に変えた——』

故にこの力、この出会いを、衛宮士郎の記録がこれから先の人生で、失う事はない。

『——唯一無二の武器の創造——』

もし、仮に、あるとすれば——

「あきらめの悪い……お前の命は昨夜、すでに尽きているはずのもの……故に——大人しく、妹と仲良く喰われるがいい」

それは心が碎けた時。

都合2回、衛宮士郎の心という核は砕けている。

一度目も二度目も、他者から救われ掬い上げられて補強された張

りぼて、三度目はこの身が耐えられない。

だから、俺は諦めるとか、妥協するって事が認められないし、認めたくない。

こんな理不尽で一方的な現実の忙殺なんて特にだ。

一人を助けるといふ行為と、新たな力を得るといふ結果を経て、俺はこうして生きている。

死んだという事実には足は竦むし、明確に認識はできない。けど、戦いたいという本能は、コイツには負けない、打倒したいという願いは俺の左胸を強く打つ。

だから確信している。

この頭に残る声も、胸の鼓動も、宿った力が確かなものだって煩いくらいに叫んでる。

今、俺が求める“助ける為の力。

「喰いたきや喰え、けどな——まひろは、返してもらっ！」

その名前、確かな形を——

「武装鍊金——！」

ホムンクルス

男、いや既に人として逸脱した存在となつた彼を形容するのにそれは相応しいかどうか——ともかく、かつて巳田と呼ばれた教職員は元来の性格をなぞる様に、目の前で叫び囀る獲物の叫びを無視して文字通り一飲み、排除行動に移った。

「世迷い言につき合うヒマはない。貴様はもう、大人しく死んでいろ」

ホムンクルス

人外、蛇を形取った金属の塊である彼に感情の有無があるのかは不明だが、彼の仲間から言わせれば人外の中で一番ホムンクルスらしいという。

他に関心が薄い。

社会に溶け込むのが上手いくせに主張に余地がない。

曰く遊びがない。

より機械的に、温度の無い声と行動はなるほど、人造生命である体を地でいくものがあるのだろう。

故に彼の行動には決められた指針がぶれる事がない。

昨夜、人気の無い筈の場での乱入は予想外だったが、想定内ではある。こうしてその予想外<sup>もくげきしゃ</sup>を取除けば、後は昨日の焼き増し、その続きを実行すればいい。

「後は、昨夜の女性の始末——」

もう一人、この姿を晒した人間の始末。

一夜で目撃者を二人取り逃がすという手痛い失態だったが、自己の中では整理はついている。

殺した筈の男が生きていたという事実は驚きではあるが、こうして体内に捉えた以上、生命である限り己の糧にかなりえない。考え付くのは蘇り、不死、再生。何れも人としては備わる筈のない能力ではあるが、そこから先を考えるなど不要だ。己の役目は主の手足となり、目となる事なのだから。

手足はモノを考えない。

どのみち、消化という不変の末路を辿るしかないものの事など歯牙に掛ける程度ですら余分であるのだから、己はその細事を在りのままに主へ述べればいい。その上で、下された采配に従うのみだ。

だが——それ故に人造の命は此处で絶たれる。

「な、なんだ？ これはいったい!？」

彼——いや、怪物<sup>カレ</sup>がこの姿になって恐らく初めてであろう驚愕の念、この身が超常であるが為に感じる事のない感覚、在り得ない事態が起こっている。

体内に感知した熱と鼓動、そして咆哮。

『“錬金術”によつて造られたこの体は、“錬金術の力”以外は受け付けない』

自分が今宵の獲物に告げた絶対不変のルールであり、ただの人間如きが己に喰われて抗う術など存在しない。

只の一つを除いて――

「――まひると俺の命、返してもらうぞ――！」

聞こえる筈のない叫びは機械の体内から、次いで眩い閃光と共に喉から突き出された鈍色の刃。

それを知っている。見たのでなく知識として、この身を貫ける刃などこの世に一種としか存在しないと断定できるが為に。

己が生物であるなどと言つつもりはないし、高等であるなど誇る気も無い。

だが、昨日まで確かに一般人のそれであつた存在が、錬金の至高の一つを持っている事実をどうして認める事が出来よう？

身の丈程の刃を持つ大剣、白と黒が混ざり合う独特の紋様を描くそれは、間違いなく自分の核と起源を同じくするモノ。

科学技術を武へと転用させた、戦術兵器の果ての姿。

「武、武装錬金……！！ 何故、貴様如きがソレをおオ――！！？」

身体が大破される中、彼はこの世で唯一障害となり得る存在をその生涯で最初にして最後憎き仇だと睨み咆哮を上げた。

手に握る金属独特の冷たさと、それに反する鼓動《熱》が手に持つ大剣を己の一部であるように、まるで手に癒着されたような錯覚

を感じる。

あの瞬間、その言葉の意味など理解しないまま叫んだ俺は、手に握った心臓の鼓動に従って振り下ろした。

拓けた視界、そこは先ほどまで俺がいた夜の校庭、周囲に飛び散る機械の破片が無ければ只の一風景として完結するはずのそれ、故にここは日常たりえず、悪夢は現実なのだと瞬時に理解すると同時にこの身が起こした事の大きさに打ち震える。

「——やった……」

手に握った剣は怪物を打倒する俺が望んだ力そのもので、事実いくら振るってもその身体に傷一つ負わなかったアイツが一刀の下に両断されている。

腕の中には飲まれた際に気を失ったのか、妹のまひろが暢気に寝息を立てている。

つまり、俺たちは助かったのだ。正確には俺は助ける事が出来た。その事実にも、何よりも訴えるものを感じた俺は、この場において最も確認すべき事を失念してしまっていた。

そう、身の安全という生物として基本である危機を察知するという事を——

「——危険だ」

「え？」

振り返ったその先、頭部から胴の中ほどまで綺麗に断線を描かれた状態のまま、欠けた顔を晒して言葉を告げる巳田だったモノ。

「その力、威力、能力。全て創造主あるじの脅威足り得る危険な存在……」  
「こいつ、まだッ!？」

大破されても尚、その体に死という終わりは訪れない——正確には破壊される傍から再生がその綻びを縫い合わせていく。

一見して無敵に思える不条理だが、よく見ると崩れる速度の方が幾分か早い事が見て取れる。

つまりコイツは長くない。

だというのに、その行為は己の死を早めるだけだというのに、コレは立ち上がる事を辞めず、崩れ断たれて用をなさない下半身<sup>ソレ</sup>など不要という様に、頭部だけを持ち上げた。

「……危険は、排除する！」

「クソ——」

生首だけが向かってくる。その姿は正に化け物然としているが感心している余裕などない。

無事だったとはいえまひろは気を失ったまま、俺も力を得たとはいえ刀なんて振った事はない。当然だ、昨日まで一般人だった俺が突然手にした力で敵を圧倒できるなんて絵空事、俺自身そんな簡単な事だなんて思っていない。依然として事態は好転しきれていない事に変わりはない。

だが——衛宮士郎は背走を知らぬ者なれば、この場においてこれ以上の逃走は在り得ず。

「——来いッ化物——」

己が選ぶ道はコレ一択だと、そう叫ぶように剣を大上段に振り上げ構えた。

そして——

<sup>クレイモア</sup>

「大剣の武装錬金か、初めてでコレは上出来だが、考えなしに飛び出すのは改めた方がいい」

何処か耳に残っていた声。

それが昨日の少女の者であり、先ほどまで電話越しに話していた彼女であると感じくと同時に、空から降ってきた少女は俺と怪物の間に降り立ち、その手に持ったナニかを掲げた。

「武装錬金！」

そこからの展開は圧倒的の一言だった。

彼女の腿に装着された機械の翼——に見間違えた二対の刃、正確

無比に、貫き引裂き断裁するそれは正に――

「処刑鎌の武装錬金……そうか、お前は……錬、金の――」

「コイツらの急所は額の章印だ。覚えて――いや、ともかく間に合ってよかった」

瞬く間に不死身の怪物を一蹴した少女はそこに何の感慨も無いという様に、その消滅を確認してこちらに向き直る。

これが衛宮士郎が体験した本当の非日常への入り口。

他の誰がターニングポイントだと言っても、既に後戻りが――いや、俺の望みが叶うと知ったその日から、俺に戻るという選択肢はなかったのだから。

俺の新たな命、“武装錬金”。

コレは俺が夢と絶望の天秤を突き付けられた物語。

衛宮士郎が英雄へと至った物語。

## （後書き）

うん、何を血迷っているんだろう俺は（滝汗）

しかもFate混ぜるとか無謀と言うかなんと言うか……あと武装錬金つてもう二ーズ的には古いんでしょうか？ 私は大好きなのですが、ええ、原作終了があまりに残念でした。

こんなもん書いているのなら本編やれよとか言われそうですが、どうかご容赦を！

気付いたら書いていたんです！ 魔が差したんです！

まあ、冗談はさておき、この作品は作者がもう一つの作品を書く合間に細々と書いていた小説のなれの果てです。もともと本人は掲載するつもりはなかったのですが、いつまでも執筆中の底に沈めておくのもかわいそうになり、こうして短編としてですが載せてみました。

作品の説明をすると、世界観はまんま武装錬金の世界、その中に主人公である“武藤力ズキ”と“衛宮士郎”をチェンジするというモノです。構想としては他のFate本編のキャラクターを出す予定はありません。凜とか桜とかワカメとか——オイ

んん、あとサーヴァントとかも出す予定はないですね。あ、切嗣は出ますよ一応、多分名前だけでも。だって彼がいないと“衛宮士郎”は“エミヤシロウ”足り得ませんからね。もともと武装錬金の世界に“衛宮士郎”を入れたらどうなるのかなっていう作者の突発的な思い付きで突然発生した作品ですからハイ。気付いたら手が文章打ってました（苦笑）

一応、今後この作品を長編化する予定はありません。誰かこの二つでクロス書いてくれませんかーなどと、他力本願でしたね（@

―@。

といつても“衛宮士郎”の武装鍊金についてはちゃんと考えてありますよ？ あと“ヴィクター化”後の武装鍊金とかも。ただ、二作品書くには作者の気力が持ちませんから（汗 ただでさえもう一つの方が亀更新ですので（^―^；）

こんな作者ですが、今後とも長い目で見ていただけたら嬉しいですよ。もう一つの作品『副担任は借金教師』もがんばりますのでよろしく願います。とか宣伝してみたり（笑

この短編も感想等頂けたら嬉しいですよ。

では、長々と失礼しました。再見！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4918y/>

---

運命の武装錬金(仮)

2011年11月14日03時27分発行